● 読書感想文コンクール 小学校 4･5･6 学年 の部●

教育長賞

林　明日花（はやし　あすか）　愛宕小 ６年生

作品名：ぼくとテスの秘密の七日間
図　書：ぼくとテスの秘密の七日間

本を読み終えて、私はとても心が温かくなった。二人の会話は、これからの人生でとても重要なことをいろいろ教えてくれた。

家族旅行に行ったサミュエルがテッセル島で一人の女の子、テスに出会った、テスはパパに会ったことがない。パパに会ったことがないってどんなんだろう。今私がこの人が本当のお父さんですといわれても、いまのように楽しくやっていけるだろうか。そこからが二人の秘密計画のはじまりだった。

「死」「孤独」「家族」とは何か、私は考えた。

サミュエルは、家族が死んでしまって一人になってしまったときのために練習していた。練習とは家族と少しの間、会わないでいることだ。私は思った。今までいっしょに遊んで笑った友達、いつも私のそばにいてはげましてくれた温かい家族、そんな幸せもいつかはなくなってしまう。考えただけでとてもつらくなった。でもヘンドリックさんは、

「これだけは、わかっているぞ。孤独に慣れても、なんの役にも立たん。」

といっていた。この言葉が私に教えてくれた。今からそんなこと考えなくっていい、自分の道を進んでいくんだ。もう一度考えてみた。すべてうしなってしまってから後であれすればよかった、こうすればよかったと思うなら、思いでができればできるほど大切な人をうしなったときは悲しくなるけど、くいのないようにたくさんその人といっしょにいろんなことをして一日を楽しかったと思える毎日をおくったほうがいいと思った。

サミュエルの言葉でとても印象に残った言葉があった。

「じぶんの人生で何をするかは、ぼくがじぶんで決めるんだ。」

という言葉だ。このとき、サミュエルはまよっていた。はっきりというべきか？だまっているべきか？私も同じような体験は何個かある。友達がころんでないていたとき、私はそっとしておくのか、声をかけてあげればいいのか相手がどうしてほし

いのか分からなくてまよった。でも、私はいたくて動けなかったらと思って声をかけてみた。そしたらだいじょうぶだよといっていたのでほっとした。でもこれからはとりあえず相手がどれくらいいたいかを確にんしようと思った。
　いままで私は
「おかえりなさい。」
と温かい声でむかえてくれる家族がいてあたりまえだと思っていた。でもそれはとても幸せで、いつかはなくなってしまうから、今できることはいっしょに遊んでくれる友達、いつもそばにいてはげましてくれる家族を大切にすること。それが今の私がすべきことだと思った。
　私はいつも友達がやるなら私もやる。人にいわれたからやめる。のように自分で思ってやるんではなくてみんながこうなら私もこうするとやっていることが多かった。でもこれからは自分のことは自分で決める。まちがえたって、失敗したっていいんだ。